

道風

道風記念館だより 第70号

発行日
令和6年3月28日
編集・発行
春日井市道風記念館
春日井市松河戸町5-9-3
電話 0568-82-6110

展覧会案内

企画展「道風記念館所蔵 現代の書優品展」 きゅつとつかめる現代書

今回の企画展では、道風記念館が所蔵する書作品のなかから、現代の書の優品を展示します。

日本の近現代史において、戦前と戦後ではいままでもなく大きな変化がありました。書の表現においても、書が会場芸術となるなどの変化により、それまでなかった新しい傾向の作品が生み出され、現在に至っています。古典を基として現代に生きる漢字の書、繊細さと力強さをあわせもつ大字仮名の書、漢字仮名交じ

りの現代の言葉で表現する書、少ない文字数で主に線表現に主眼をおいた書、紙面構成と線表現で勝負した非文字の書など、さまざまな書表現をこの展覧会で味わっていただけます。館蔵の書作品という範囲ながらも、日本の現代の書のエッセンスをきゅつとつかめる展覧会です。

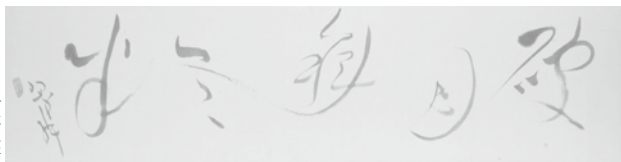
会期 令和6年4月26日(金)～7月15日(月・祝)

観覧料 一般：100円、高校・大学生：50円、
中学生以下：無料

休館日 月曜日(祝休日の場合は翌日)

展示品解説 5月11日(土)・6月9日(日)

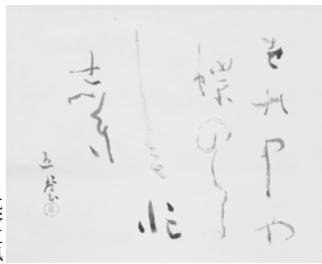
①10時30分～11時 ②14時～14時30分



鈴木翠軒



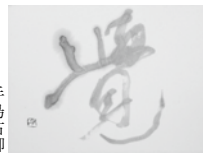
青山杉雨



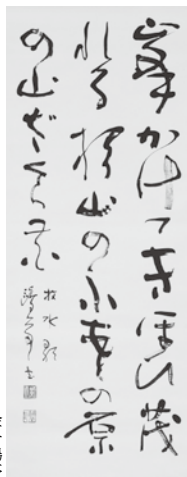
日比野五鳳



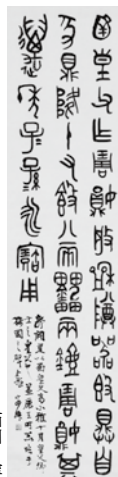
飯島春敬



手島石卿



金子鶴亭



西川寧

展示品の作者

- 鈴木翠軒 安東聖空 田中塊堂 上田桑鳩 大池晴風
- 松井如流 桑田笹舟 日比野五鳳 手島石卿 小坂奇石
- 大石隆子 西川 寧 桑原翠邦 飯島春敬 金子鶴亭
- 上條信山 山崎大抱 中野蘭疇 青山杉雨 宇野雪村
- 比田井南谷 森田安次 岡本白濤 大平山濤 梅 舒適
- 戸田提山 成瀬映山 松下芝堂 日比野光風

鷹司兼平

鎌倉後期・法性寺流の能書

古谷 稔

鷹司兼平（一二二八—一二九四）は、本姓藤原猪熊関白と称された近衛家実の四男で、鷹司家の始祖となった人物である。鷹司家といえは、藤原忠通から出た近衛・九条

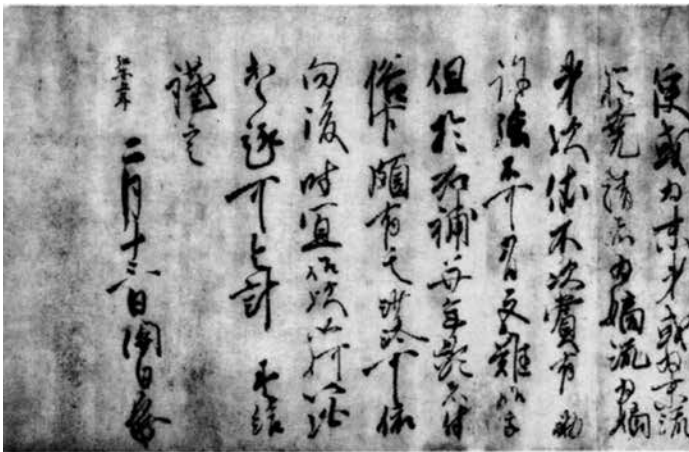
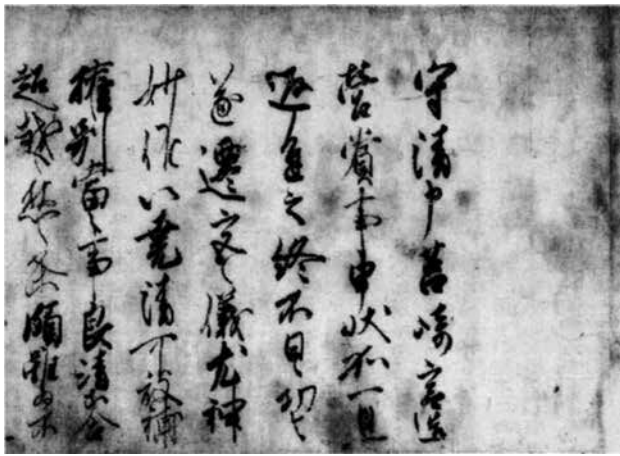


図1 鷹司兼平自筆消息（宮内庁書陵部蔵）

二条・一条の四家とともに五撰家の一つ。平氏没落後、源頼朝は兼実を推して摂政とし、以後、忠通嫡男・基実の近衛家と、忠通三男・兼実の九条家とに分かれた。その後、兼実の孫・道家が朝廷幕府に権勢をもたらし、三人の子息、教実・良実・実経がいずれも撰関となり、九条家は九条・二条・一条に分かれ、一方の近衛家は、兼経が当主の時、その弟・兼平が鷹司家を興した。兼平は嘉禎三年（一二三七）二月に元服して禁色昇殿を果たした。禁色は朝廷で着用を禁じられた衣服の色。大臣の子孫などが禁色宣旨をうけて

勅許により使用が許された。ついで右少将、翌年正月、十一歳で従三位となり、公卿に列した。同年閏二月に権中納言、四月に権大納言と累進し、仁治二年（一二四一）に内大臣、三年後の寛元二年六月に右大臣、同四年十二月に左大臣、宝治二年（一二四八）十月に従一位、建長四年（一二五二）十月に摂政・氏長者となり、同年十一月には太政大臣に昇進。時に二十五歳であった。その後、太政大臣を辞任また還任、摂政・関白の任も繰り返されたが、弘安十年（一二八七）八月十一日に関白を左大臣・二条師忠に譲り、兼平は官仕えを終えた。正応三年（一二九〇）三月三十日には高山寺に出家し、永仁二年（一二九四）八月八日、六十七歳で死去。称念院入道関白と称せられた。

兼平の書については、伏見天皇皇子・尊円親王の書論『入木抄』（日本思想大系23『古代中世芸術論』）では、伏見院御書、近来天下に盛に奉二賞翫一之。就中仮名は一向其様也。

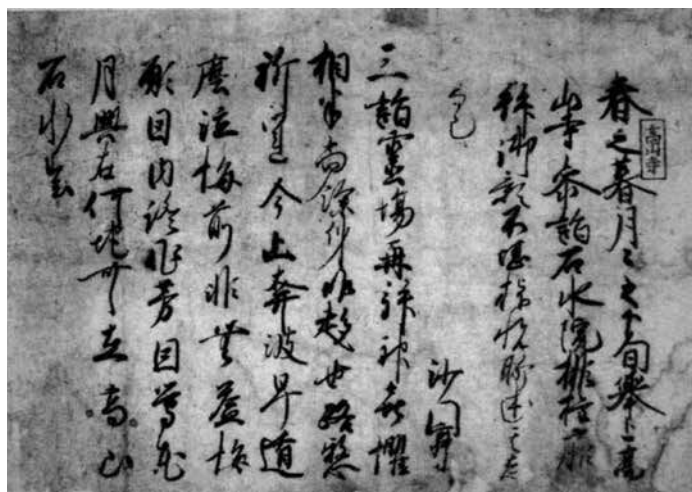


図2 高山寺本「鷹司兼平筆跡」(高山寺蔵)

此仮名も法性寺関白以来称念院関白の筆跡也。是を被_レ摸_レて御天骨にてあそばし出されたる歟。(伏見院御書、近来、天下に盛んに賞翫たてまつる。なかんづく仮名は一向其の様なり。此の仮名も、法性寺関白以来、称念院関白の筆跡なり。これを摸されて御天骨にてあそばし出されたるか。) (読み下しは稿者)と述べる。尊円親王の在世中、父帝・伏見天皇(一二六五—一三二七)の書が珍重され、なかでも仮名書は一大流行したとする。その母体が、兼平の筆体を基盤としたもので、伏見帝はこれを学んで天性を發揮されたのではな

いか、と見ている。

伏見帝と兼平の關係は、帝の東宮時代十二歳で行われた御書始での出会いと知る。兼平はこれに参仕、次いで場を変えて手習始が行われ、この時に御手本に用いられたのが、兼平が献じた「行成卿書」であった。

藤原行成の行成様の書に親しんだ伏見帝は、その日記『伏見院宸記』の中で、藤原忠通の書に対して「誠に殊勝なり」と評し、伏見帝の美意識の中には、優美な行成様とともに、雄勁闊達な法性寺流の書にも価値を見出している。

兼平が能書として喧伝されたことは、歴史物語『増鏡』にも示される。康元元年(一二五六)十一月十七日、前太政大臣西園寺実氏の女・従三位藤原公子が、後深草天皇の宮廷に女御として入内した。それからほどなく後深草帝から女御に再度の消息が送られた。帝の消息は兼平が清書を奉仕している。それはおそらく、仮名によって書されたものである。『増鏡』(第六おりある雲)、『日本古典文学大系87』には、

こたみも殿書かせ給めり。この比、殿ときこゆるは、太政大臣兼平の大臣、岡の屋殿の御弟ぞかし。後には照(称)念院殿と申たり。御手勝れてめでたく書かせ給しよ。鷹司殿の御家のはじめなるべし。

と、岡の屋殿(近衛兼経)の弟である称念院殿(兼平)が、すぐれた能書であり、鷹司家の創始者であることも強調する。ところで、自筆と確証ある兼平の現存する書を取り上げるとすれば、

① 鷹司兼平自筆消息(宮内庁書陵部蔵)

一巻(図1)

② 高山寺本「鷹司兼平筆跡」(高山寺蔵)

一幅(図2)

の二点である。

①の兼平自筆消息に注目したい。本紙は懐紙三枚継ぎであり、本文は「管崎宮造賞賞事」に関わる文面であるが、内容は詳らかでない。末尾に二月十三日の日付と「関白(花押)」の署名があり、日付の肩に異筆で「弘安五年」の注記が見える。書風はまさしく法性寺流を示し、その書は②の高山寺本と同筆と容認される。ちなみに弘安五年(一二八二)は兼平五十五歳に相当し、闊達な書風で一氣に書き上げている。

②は、兼平が晩年に高山寺の石水院に参詣した時の詠詩を懐紙に書したもので、本紙寸法は縦三六・七センチ、横五一・六センチで、掛幅装になる。本紙の右上、墨書の第一行目に接するように「高山寺」の朱長方印を捺す。本文は行草体で豊潤な書風を展開する。

詩題に続き、「沙門寂口」の署名を書す。その四字目は、墨痕の残画がわずかに見えるが、かつて、稿者はこれを「沙門寂理」と判読した(拙稿『MUSEUM』四三七号参照)。「寂理」とは、兼平の出家後の法名である。その書は、しなやかで筆力旺盛な法性寺流を継承し、①よりもやや枯れた兼平晩年期の趣を滲ませている。

ともあれ、鷹司兼平の書は、前掲の家系から見ても、法性寺関白・藤原忠通から流れた書流と推察され、漢字・仮名のいずれにも巧みな兼倉後期の法性寺流能書として銘記すべきであろう。

(東京国立博物館名譽館員 ふるやみのる)

令和6年度 スケジュール（前期）

3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月
	<p>企画展「道風記念館所蔵 現代の書 優品展」 4月26日～7月15日</p> <p>・所蔵品のなかから、現代の書の優品を特別展示。</p>							
					<p>企画展「おののとうふう」 7月20日～9月1日</p> <p>・子どもにもわかりやすく小野道風を紹介。 ・ワークショップを実施。</p>			
						<p>特別展「岡寺版集帖」 9月6日～10月14日</p> <p>・日本でつくられた集帖「岡寺版集帖」と元となった名碑拓本を展示。 ・講演会を実施。</p>		
			<p>「国宝源氏物語絵巻の魅力にせまる」 講師：四辻秀紀氏 6月～7月 全4回</p>					
<p>展覧会 ■■■■ 講座 ■■■■■■</p>								
<p>常設展示 小野道風をはじめとする平安時代の書について</p>								

※内容・会期等を変更することがあります。

第43回 道風の書臨書作品募集

道風記念館で開館当初から開催している公募展です。和様の書を創始した小野道風の偉大さを改めて考えていただくことを目的の一つとしており、小野道風の書だけでなく和様の書を継承し完成させた藤原佐理・藤原行成の書も課題の範囲としています。今回も奮ってご応募ください。

[この臨書展の特長]

- 出品料は無料です。入選作品は、当館で裏打ちして展示しますので、表装代もかかりません。
- 審査員は、当館顧問の古筆等研究家です。一般の部は、出品者名がわからない状態で厳正に審査が行われます。
- 審査の結果優秀に選考された作品は、収蔵品として保存します。

○ 臨書の対象 〈一般の部〉小野道風筆玉泉帖・伝藤原行成筆粘葉本和漢朗詠集

〈高校生の部〉小野道風筆智証大師諡号勅書・伝小野道風筆小島切

○ 賞 優秀・秀作・入選

○ 搬入締切 令和6年10月25日(金) 必着

※課題の部分が決まっていますので、募集要項をご確認のうえご応募ください。

※出品には出品票が必要です。要項・出品票をホームページからダウンロードするか、道風記念館へご請求ください。

